

悪魔交渉人
1. ファウスト機関

栗原ちひろ



富士見L文庫

- 0・八月某日、東京近郊
- 1・夜の美術館へようこそ
- 2・洞穴に棲むもの
- 3・五得
- 4・眠るゆめ
- 5・誘拐劇
- 6・ひとなるもの、ひとならぬもの

あとがき

339 250 217 165 118 057 007 005

Evil Spirits Negotiator・Chihiro Kuchihara

ひどく暑い夏だった。

耳の奥まで突き刺さる蟬時雨しぐれの中、所長の眼鏡が白々と光っている。

「志藤君だったか。まあ、ともかく中へ入りたまえ」

「はい」

一礼して金属扉の中に入ると、ふわりとかび臭い冷気が押し寄せてきた。

今の今までかいていた汗が一気に冷えて、志藤は大きく身震いする。単純な気温差のせいだろうが、なんだか悪寒じみたものを感じる。

立ち尽くした男の眼前に、所長が名札と紙片を差し出した。

「これをつけて。それにしても、君のような若者が来るとはなあ。世も末だ」

「精一杯、頑張ります」

「精一杯？ 君、ここが何をやるところか知つとるのかね。扉、閉めたまえ」

所長に言われ、振り返って重い扉を閉める。厳重な施錠の後に振り返ると、そこは狭い洞窟どうくつの中だ。正面にはハッチ状の円い扉があり、所長はその前でうつすら笑っていた。

いいえ、とかすれた声で言い、志藤は胸に名札をつけようとする。その拍子に、一緒に渡された紙片が滑り落ちた。

「おい、大事にしろ。ちゃんと持っておけ」

「はい、申し訳ありません」

所長の形相が変わったのを見て、志藤は慌てて紙片を拾った。真っ白な紙をざっくりとひとの形に切ったものだった。祓えに使う形代だ。

なんのつもりで、所長はこんなものを渡すのだらう。

志藤は所長を見た。彼はどこかくたびれた顔で目を細め、肩をすくめて見せる。

「まあ、気休めだがな。志藤君は、こういうのを知ってるか。『未だかつて攀げられたことのない秘密の垂衣の背後に、一つ一つの奇蹟が己達の窺うのを待っている。さあ、〈時〉の早瀬に、事件の推移の中に、この身を投げよう』」

「引用ですか」

おそろおそろ男が訊くと、所長はうなずき、力をこめてハッチを開け放った。

「ゲートだよ、ゲート。ファウストだ。——ようこそ、志藤君。我が、F機関へ」

1・夜の美術館へようこそ

「すみません。すみません。あの。すみーまーせん！」

最初は控えめだった声が、段々と大きくなる。

聞こえていないはずはないのに、カウンター内の職員は目を覚ます気配がなかった。

スツールに座って腕を組み、安らかな寝息を立てる二十代前半から半ばの男。

がつくりと後ろへのけぞるたび、スツールが危険な軋みをあげるが、彼は転げ落ちるぎりぎりのところで耐え続けていた。

「ほんととは起きてんじやないの？」

近所の高校の制服を着た少女は、むっとしてカウンターの上に上半身を乗り出す。

半透明の樹脂で作られた半円形のカウンターには『W M U A ・ N I T T O H 美術館』の文字がデザインフォントで直接刻印されており、カウンター上には『一般八百円、学生五百円』の看板が出ている。開館時間の表示は午後五時まで。

看板の隣の美術館オリジナル時計は、午後四時五十分を示していた。

「すみません、あの、鷹栖さん」

「あー」

鷹栖、と呼ばれて、職員はどうにかうつすら目を開く。

彼の首から下げられたスタッフ証に印刷された名は、鷹栖晶とある。

名前の横の写真は、本物より大分爽やかに撮れていた。短めの黒髪に、日本人らしいすっきりとした顔だち。屈託なく笑う彼は、どこへ出しても恥ずかしくない好青年だ。

本物の彼はというと、ぼうっと少女を見たかと思うと、すぐに目を閉じてうなる。

「あー……またか」

「ちよっと、またってなんですか、またって。ねえ、私、常連！ こんな地味な美術館に年間チケット買って来てる常連なんですよ！ お得意さまですよ！」

「んー。いや、そうじゃなくて。毎度、ありがとうございます……いいよ」

「いいよって、何がですか。それって完全寝言ですよね」

ますますむくねながらも、少女は背伸びして晶のほうに耳を寄せる。

晶はうとうとしながら、ぼそぼそ告げた。

「……通ってオーケー……」

「もう通りました！ さつき来て、ひととおり見て、帰るところです。そろそろ閉館時間ですよ。ねえ、仕事しないでいいんですか、鷹栖さん」

「うん」

あつさり言われ、少女は言葉につまる。

いいわけがないじゃない、誰か見てたら怒られるよ、と注意しようにも、辺りに他の職員の気配はない。さらに言えば、客の気配すらないのだ。

ふたりのいるチケットブースは透明樹脂で作られた立方体の小部屋になっており、立体造形展示室の全景が見渡せる。一階のメイン展示室である立体造形展示室は、実に美しいホールだ。戦前の銀行を改築したという石造建築はいかにも重厚で、床は磨き上げられた大理石、壁にはずらりと和洋折衷のステンドグラスが並んでいる。

これだけでも一見の価値はあると思うのに、ゆつたりとした吹き抜けの展示室にたたずむのは国内外の立体造形ばかり。生きた人間は、晶と少女しかない。

「大体ここ、来るたび全然ひといないんですよ。目玉っぽい作品もあんまりないし、もつと企画とかやったほうがいいんじゃないですか？ 私は、静かなところも嫌いじゃないですけど。この美術館がつぶれたら、困るって言うか。ほら、年間パスも買ったし」

最後は曖昧に言葉を切って、少女は唇を噛んだ。

こんなことを言ったって、どうにもならないのはわかっている。昔からの港町で、異国情緒がひとを惹きつけてやまない町、横浜桜木町にありながら、NITTOH美術館は果てしなく地味だ。横浜生まれ、横浜育ちの少女だって、春に出た課題のためにネット検索するまで知らなかった。建物はいいが内容的に売りはない。運営も職員もやる気がない。

そんなところに貴重な放課後を使って通うなんて、正直ばかばかしいと思っている。なのにどうして年間パスまで買ってしまったかといえば、理由はこの、年中眠そうな駄目職員に他ならない。本当にばかばかしい話だが、気になるのだ。

春に初めて訪れたときも、晶は今日みたいに堂々と居眠りをしていた。びっくりしてたき起こしたら、彼はぼんやり笑って、『何か悩んでる顔だ』と言った。友だちだけにかけるような親しみと心遣いを感じる声だった。少女は最初にびっくりし、次に慌てて、気づけばいつでも彼が居眠りしていないかどうか気になるようになってしまった。

そうして通い始めて、早二ヶ月ほど。そろそろ少女も相手の反応が物足りなくなってくる。現役女子高生が通ってくる意味について、晶は一体どう考えているのだろう。

はつきりしない気持ちをもてあまして口ごもっている、不意に晶が口を開いた。

「また、夢だ」

「はい？」

少女は慌てて顔を上げ、晶の顔を見てはつとする。

彼はいつの間にか、はつきりと目を開いていた。どこことなく青みがかってすら見える、黒い瞳。^{ひとみ}鋭すぎるほどの目で、彼はつぶやく。

「遊江の」

「ゆえ、さん？」

それって、女のひとの名前だろうか。

少女の顔が自然とかすかに歪^{ゆが}んだとき、ぼーん、と何かが軽い電子音を立てた。

晶は少女の顔を真っ向から見つめて、眉^{まゆ}をひそめる。

「君」

「はい？」

どきりとして聞き返すも、晶はすぐに視線を逸^そらして続けた。

「ごめん、外に出て」

「えっ、でも。その」

「ごめんね、もう閉館時間だから」

反論を許す気配はみじんもない。晶はカウンターから出て、出口に向かう。こんな対応をされるのは初めてで、少女は戸惑いながら彼の後を追った。

「わかってます、帰りますよ。ただ、あの。さっきの、ゆえ、ってなんですか？」

「俺、そんなこと言った？」

晶は木製の重い扉を開け、にっこり笑って振り返る。

綺麗な顔^{きれいな}だった。今まで見たことがない、鮮やかな笑顔。

こんなふうに笑われたら、気づいてしまう。このひとつ、格好いいんだ。

意識した途端に声が出なくなった。晶の姿がすうっと遠くなっていくような気がする。

相手がモニタか雑誌の向こう側にいるような感覚。心臓の辺りに熱いむずがゆさを感じて、少女は慌てて彼の顔から視線を逸らした。

逸らした先では、晶の首から下がったスタッフ証が揺れている。

印刷された写真は、今の彼の表情とまったく一緒だ。証明写真用の笑顔。わかって作っている顔。親しげに見えて、よそ行きで、他人行儀の顔。

少女は強く唇を噛み、密かに息を吐いた。そのまま晶の横をすり抜け、外へ出る。

石段を下り、昼間の熱でほてった街路に立つと、少女は一度だけ振り返った。

「鷹栖さんって、ずるいひとですね」

顔を見ずに言い、夏の夕暮れの中へと走り出して行く。

遠くなっていく彼女の姿を眺め、晶は軽く頭を掻いた。異国めいた町並みは、夕日の色で劣化して見える。混み出した車の列と、急ぎ足になるひとの列。しごく平凡な風景。

「ずるいひと」

つぶやいてみるが、実感はなかった。深く悩むほど、心の中に落ちてくる台詞でもなかった。今は、あの少女が無事にここから立ち去ることだけが大事だ。

少女が角を曲がったのを確かめ、晶はやつと身を翻す。美術館内部に戻り、手慣れた所作で扉に二重鍵をかけ、壁のレバーで扉の手に格子戸を下ろした。展示室は外とは打って変わって涼しく、展示物の輪郭がぼやけるほどに薄暗い。

晶の視線が天井を舐める。わざとらしい笑みが消えた今、彼の瞳は恐ろしく鋭い。見るべきものだけをとらえ、素早くチェックしていく。スポットライトは全部ついている。ステンドグラスからの色とりどりの光も床で躍っている。なのに、暗い。

晶の瞳が青みを増す。焼けつくような青だ。

ぼーん。

また、あの電子音がした。

「おかしいのは、俺か」

確信と共に囁き、晶は足早に展示室内へと入った。スイッチボックスを操作すると、ずらりと並んだステンドグラスに一齐にシャッターが下りる。陽光に照らされる床面積が徐々に狭くなり、周囲はますます暗くなった。

さっきの少女は気づいていなかった。ホールの異様な暗さも、濃くなっていく冷気も。

この冷気は空調によるものではない。骨まで滲みる悪寒。ここによくないものがある。全身がそう警告してくる。冷たい灰色の水に足下から浸っていくかのようだ。暗い視界の端で、ついているはずのスポットライトがからかうように瞬くのを見て、晶はいったん目を閉じた。

目蓋で視界が遮断された瞬間、ちらりと夢の光景がフラッシュバックする。

青い空。どこまでも続く砂漠。そこを貫くアスファルト道路。

風が吹いて、黒煙がゆっくりとたなびく。

五年前のエジプト。死にかけるたびに訪れる場所。

さっきのうたた寝でみた、お定まりの悪夢だ。

夢の光景の向こうで、ぼーん、ぼーん、と、電子音が鳴っている。

晶は重いまぶたに力をこめて押し開いた。冷気と闇は、吹き抜けのホールをすっかり覆い尽くしてしまった。目を凝らさなければ、どこに何があるかを視認できない。かろうじて、樹脂製の壁の向こうで、カウンター内のPCモニタが鈍く光っているのが見えた。

「いい加減にしろよ」

小さく吐き捨てると、晶は出来る限り素早くホールを横切り、カウンターに戻ってモニタと向き合った。淡く発光するモニタの真ん中には、『終業処理を開始しますか？』のダイアログが出ており、その周りをチャットの窓が埋め尽くしている。

書いてあるメッセージはどれも同じだ。

『僕を呼んだね、晶』

「誰がだ」

晶はマウスのカーソルを『終業処理を開始しますか？』の『はい』に載せる。

その横に、また、ぼーん、とチャットの窓が開いた。

『君の願いは何？』

『願いを言って。叶えてあげる』

「お前」

毒づきそうになった声を、どうにか奥歯ですりつぶす。晶はマウスを終業処理の窓から外し、他のソフトを起動した。間を置かず、画面いっぱいになり黒い円が出現する。少し遅れて円の中には十六のマス目が現れ、それぞれになんらかの文字が浮かび上がった。

画面と連動し、何かの切り替わる音が展示室に響く。

晶が視線を上げると、スポットライトの真下の床に、画面と同じマークが黒々と浮かび上がっているのが見えた。

「いいな。これで、いいかげんに黙っとけ」

小さく言い、辺りを探った。展示室内は、先ほどよりは少しだけ明るく見える。

冷気も気にならない程度にはゆるんだ。チャットの窓は静止している。

晶は小さく息を吐く。

と、次の瞬間、ぼん、ぼぼん、と着信音が連続し、チャットの窓がすべて『はははははははは』という文字だけで埋まった。ばかばかしいほど乾いた嘲笑^{ちやうしやう}。どこまでも、どこまでもたった一種類の文字が続く。聞こえない声が聞こえそうになるほどに、延々と。

「てめえ！」

晶の瞳の奥で、光がひらめく。

過剰なほどの怒りと憎しみが、どっと心臓から血を吐き出させる。マウスに載った手がかすかに震える。

そのとき、ホールに冷たい声が響いた。

「鷹栖君」

はっとして、晶はマウスを放り出して後ろを振り返った。

透明樹脂の壁の向こう、ホール正面の大階段に、いつの間にやら人影がある。

品のよいロングタイトのスーツをまとい、片手に大きな赤い本を持った長身女性だ。薄闇の中にあっても、そのひとのシルエットはすつと視界に飛びこんで来る。惻然（はげ）すぎるほどきつぱりした立ち姿に、晶ははっと一息ついた。

「天方（あまがた）主任」

天方は美しい顔に高慢な皺（しわ）を作り、よく通る声を張り上げた。

「今日も元気に寝ぼけているようだけど、業務の切り替え作業はまだかしら。W M U A は君の心地よい昼寝のために給料を払う組織ではなくてよ。ここからが、君の時間」

「はい。申し訳ありません」

晶は少し崩れた笑みを見せ、画面を直視せずに『終業処理を開始しますか？』のダイアログの『はい』を押した。途端に画面の色が変わり、一瞬複雑な模様が現れた後、W M U A のロゴと共に一文の英文が現れる。

同時に展示室奥の扉の電子キーに灯った色が変わり、開け放しになっていたチケットブースの自動扉もびたりと閉まった。システムが夜用に変わったのだ。

W M U A、すなわち、世界博物館連盟所属、N I T T O H 美術館。桜木町の中でも古い建築が残る地区にあるこの美術館には、昼と夜、ふたつの顔がある。

昼は観光コースからも外れた、寂れた美術館。

夜はこれから始まる。

晶は指紋認証で扉を開け、改めて展示室内へと戻り、大階段を封鎖しているロープをのけて、天方に一礼した。夜の美術館の現場指揮官である天方は、どこか中性的な美貌（びようぼう）で彼を見下ろし、ヒールの音を響かせて階段を下りてくる。

スポットライトの描く黒い記号の前に立ち、彼女は言う。

「土星の一の護符ね。悪霊から身を守る必要性を感じたのかしら」

「どうも、あいつがごねたみたいですね。夢見も悪かったし」

晶が言うと、天方は手にしていた赤い本の表紙を開いた。

ぶ厚い表紙の裏には、二十二枚の金属メダルがはめこんである。彼女はその一枚を取り、晶に向けて放り投げた。

「これからごねたペットのご機嫌取りよ。防衛ソフトよりこっちのほうが実体があるぶん効きやすい。持っておきなさい」

「ありがとうございます。あんなもんを愛玩するほど、俺の愛は余ってませんけどね」
晶はメダルを受け取った。床に浮かんでいるのと同じ、マス目の中に謎の記号を収めた文様を確かめ、ポケットに入れる。

「通いの女子高生に振りまく愛ならあるのに？ 随分と薄情なこと」

天方は言い、晶を引き連れて展示ホール右奥の扉へ向かった。スタッフ証と指紋で開くスタッフオンリーの扉の奥は、小さなエレベーターホールになっている。

形ばかり古風なエレベーターの扉の前に立ち、晶は少し雰囲気を経て頬を掻いた。

「あの子ねえ。俺のこと、凄く好きですよ。もったいない。痛っ！」

いきなり重い本で頭をはたかれ、晶は不満顔を天方に向ける。天方はボーカルフエイスの唇をわずかに震わせ、吐き捨てるように言った。

「あなたのそういうところ、もの凄く気持ち悪い。『凄く好きですよ』？ 気づいていたら、もっと早くどうかしなさい！ 女の子が可哀想でしょう。善良な一市民なのよ。明るい未来が山盛り待ってる相手よ」

「そんなこと言ったって、今日初めて『好きだ』ってはっきり顔に出たんですよ。昨日まではあの子、そんな気なかつたはずです。俺、見ればわかりますもん」

順序立てて主張するものの、天方は虫を見るような目で晶を見た。

「昼のぼやぼやした顔で高校生引っかけたおいて、師匠譲りのスピリチュアル顔相占い。」

いい面の皮の厚さよねえ。常々不思議なんだけど、その不思議ちゃんキャラって、わざと作ってるの？ それとも、素？」

不思議ちゃん呼ばわりに、晶は思わず苦笑する。自分の中では不思議でもなんでもないことだが、ひとに説明するのは難しい。本来晶は、何もなければずっとぼうっとしていたいし、作り笑いもしたくない。現実がそれを許してくれないから、夜の顔が出来ただけだ。顔相占いにいたっては、幼少時からの癖である。

「素ですよ。花だつて虫だつて人間だつて、そのときの気分は顔に出る。小さいころから本当にそう思ってますし、ここ五年くらい嘘なんか吐いてません。生半可な嘘なんか、あれにつけこまれるだけですから」

あれ、と晶が言うのとはほとんど同時に、ホールに古めかしいベルの音が響いた。続いてエレベーターの扉が開き、ふたりは無言で乗りこむ。

さて、ここでひとつ奇妙なことがある。

このエレベーターには、『開』『閉』以外のボタンがないのだ。

当然のように動かないエレベーターの中で、晶と天方は黙って並んで立っている。

何もしていないように見えて、晶はさつきモニタに映った英文を頭の中で反芻していた。W M U A のモットー。和訳すると、『最も大切な事は、研究ではなく、実行である。未来に種を撒け』となる。天方も同じようにしているのだろう。口を開いた方がいいが、口調は

さつきより物憂げだった。

「都合のいい嘘のひとつも吐けないようじゃ、ゆめみがちな高校生を優しくふったりも出来ない、か。業が深い話ね」

「逆に夜の業務の現実を喋^{しゃべ}ったら、愛想尽かしてくれそうですけどね」

苦笑混じりに言うのと、目の前でちらちらと青い空が揺れた気がした。五年前のエジプトの夢。一度思い出してしまうと、なかなか剝^はがれ落ちてくれない記憶。あのときから始まった全てを話したら、彼女はどんな反応をするだろう。ストレートに同情はしてくれないはずだ。きつと呆^もれて、少し怒る。どんな漫画のネタですか、とかなんとか言つて。

「だけど、ひとには、知らなくてもいいことがあります」

晶はつぶやいて目を閉じ、強く自分の唇を噛^かみしめて、痛みを頼りに集中した。胸の奥に宿^{おこ}った熾^{あき}火のような怒りを忘れ、静かに呼吸する。冷静であれ。ひとであり続けるために、冷静であれ。繰り返しながら、さつきの英文を思い出す。脳裏に刻むように、一文字、一文字。

英文が脳内にすべて揃うと、エレベーターがわずかに揺れた。ぐんぐんと下がっていく感覚にほっとして、晶はそっと目を開く。

視界の端で、天方がこちらを見つめているのがわかった。

「脳波認証までに時間がかかりすぎてみたいね。今日は、もう少し時間を置いてから業

務に当たる？ 無理はよくないわ。失敗はできないんだから」

彼女の声はあくまで冷静だ。冷静さはW M U Aの構成員には最も必要な素質。なのに晶にはそれがどうしても足りない。あれに関わる時には、どうしても心臓が熱くなる。

「いえ、このまま行きます。ごねてるあいつは、俺の言うことしか聞かないですから」

晶は小さく息を吐いてから、瞳^{ひとみ}を鋭く言う。

天方は彼の横顔をじっと見つめ、前方に向き直ってから長身の背を伸ばした。

「知つての通り、N I T T O H美術館にはW M U Aの総力を挙げて万全のセキュリティ対策が取られているわ。上物なんかただの飾り。この地下は半端な爆弾くらいでは吹き飛ばないし、脳波認証は現状最も精度の高い認証方法と言える。ここまでするのはなぜ？」

「収蔵品が危険きわまるから、でしょう」

「そう。でも、忘れないで。最も危険な収蔵品は、奴^{やつ}と君^{きみ}なの」

天方が即答する。

ベルの音が鳴って、扉が開いた。

「こんばんは、天方主任、鷹栖さん」

がらんとした空間に警備員の声が響く。ふたりが来ることは監視カメラで知つたのだらう。ブースで待ち構えていた警備員に会釈を返し、晶は先ほどまでとは打って変わって現代的な空間へ歩み出た。ここは広さだけでなく一階の立体展示室と同等の、ドーム型のホー

ルだ。味わいの点では、一階とは比べものにならない淡泊さ。白すぎて距離感の掴みづらい部屋には、警備員用のブースと、黒い扉がひとつあるだけだった。

「こんばんは。今夜は忙しそうですか」

晶が訊くと、警備員は浅くうなずく。

「緊急の搬入が一件あるそうですよ」

「そうそう、そのことについて、館長からあなたに話があるわ」

天方に言われ、晶は彼女と扉の前に立った。

「館長が俺にですか。よっぽど大物が来たのかな？」

「面白くも怖くもなさそうに言うわね」

「仕事ですからね。仕事は日常です」

館長の洒落ついで地獄門を模した扉が開くと、途端にざわめきが押し寄せてくる。半円形の部屋から三本の廊下が放射状に延び、廊下の奥では何やら熱心に語り合う声が聞こえ、荷を運ぶ合図が響き、コーヒ一片手に白衣の男性職員が駆け抜けるのが見えた。

この空気こそが、本当のNITTOH美術館だ。

「鷹栖君は、まずは奴のところへ行つて。終わったら館長室へ。護符を大事になさい。気休めだけれど、信じていればそこそこ効く。思いこみこそが、最も重要なマジックよ」

天方の声に力がこもったのを聞き、晶は目を細めて笑った。このひとは優しい。心底晶

のことを心配し、根っこでは信頼してくれているのがわかる。

「了解です。飼い主、人間の尊厳にかけて頑張ります」

「期待してるわ、交渉人」

低く囁き、天方は身を翻した。晶も彼女とは別の廊下へと進む。

ひとりになると、晶の歩調は自然と速くなった。美術館の地下は広大だ。薄い絨毯を貼った廊下は長く、左右にはロッカールームや会議室、研究室、作品庫などがずらりと並んでいる。研究室や作品庫には、いちいち脳波認証のゲートが設置しており、一体幾らかかったのか考えると冷や汗が出る。それだけの金をかけて、W M U Aは収蔵品と晶たちを守ろうとしているのだ。

盗まれないように、勝手に外へ出て行かないように。

晶とすれ違う職員たちは、彼の姿を見るとしばしば会話をやめて会釈をよこした。晶はこういうとき、さりげなく目を逸らして会釈を返すことにしている。相手の表情を読んで、そこにあるのはかすかな怯えや同情だ。晶の仕事を知っている者は、誰もが意識して晶から距離を置く。それは個人の感情に関わりがないW M U Aのルールで、例外は天方含め、数人の幹部しかいない。

「あらっ、晶ちゃん！ 今日また凄い隈ねえ。美白クリーム貸したげようか？」

野太い声をかけられて視線をあげると、廊下の向こうに肉の塊が見えた。正確には、タ

ンクトップとズボンと白衣をまとった筋肉の塊のごとき禿頭の大男だ。

通りすがりのボディビルダーにしか見えない男の姿に、晶の顔は勝手にほころぶ。

「パンダみたいで可愛いでしょ。佐鳥さんは今日もいい上腕二頭筋。武者震いしてる？」

晶が相手の筋肉に話しかけて軽く叩いてやると、佐鳥はこてこてのマツチョポーズを決めてにやりと笑う。完全に肉食獣の笑みだが、彼はシステム担当の頭脳派であり、晶に個人的に話しかける『例外』のひとりでもある。

「あたし知ってるわ。晶ちゃんも脱いだら素敵な細マツチョだってこと。筋肉は芸術であると同時にファッション！ 引き算は大事、上級者の技よ。それはそれとして、脳波認証、反応悪かったみたいじゃない。ちよつと時間もらえたら、調整やり直すわよ」

「ああ、あれは多分、俺の夢見のせいだと思うから。大丈夫だよ」

晶はほんのり笑って言うが、佐鳥は真剣だ。

「ほんと？ 晶ちゃんって明るいばややんに見えて意外と悩みを抱えこんじゃうタイプだから、あたし心配。調整が必要なら早めに言って。いいわね？」

ひと睨みで牛くらい殺しそうな顔にあふれる誠意に、晶は心をこめて返した。

「わかった、早めに言う。約束する。駄目だったら、俺の脳みそ樹脂で固めて、施設のどこかに飾ってやって」

「晶ちゃんの、脳標本か」

一瞬真顔に戻って考えこんだ末、佐鳥は我に返った様子で情けない顔になる。

「もう、悪い冗談！ 樹脂含浸より生がいに決まってるわよ。頑張ってるね、晶ちゃん。あんなのに引きずられないで。頼りにしてる」

「おう。佐鳥さんも頑張ってるね」

晶が軽くボディビルポーズを返すと、佐鳥は目をぎらぎらさせたまま、きやつ、と可愛く言って去っていった。晶は小さく笑って彼を見送り、さらに先へと進む。

幾つか扉を抜けていくうちにひとの気配は減っていき、果てにたどり着くころには晶はひとりきりになっていた。佐鳥に少し明るくしてもらった気持ちは、歩けば歩くほど心臓の熱さに呑みこまれてつある。瞳が再び青い熱を帯びてきたのを自覚しながら、晶は廊下の突き当たりを見つめた。そこにはハッチ状の無骨な扉があり、専用の認証ゲートが備え付けられているが、警備の人員はいない。

扉をねめつけつつ、晶は再びW M U A のモットーを思い浮かべた。今度はほんの一秒ほどのタイムラグで、錠の開く大仰な音が響く。

「おーい、ばか。入るぞ」

口調は気さくだが、声は冷たく低く言い、重い扉を押し開いた。

すぐに踏みこむのは気が進まず、まずは顔だけを中に入れて室内を確認する。

間接照明だけで照らされた、薄暗い部屋だ。広さは大体二十畳と言ったところだろうか。

銀行の金庫じみた扉とは一転して、中は落ち着いた色合いに満ちている。

紺をベースに帆船が織りこまれた絨毯に、漆喰飾りのついた暖炉。真ん中には重いマ호가ニールの書斎机があり、机上にはうずたかく書物が積まれ、巨大なオウムガイを使った芸術的なランプがそれらを照らしている。さらに四方の壁は作り付けの本棚で、天井は高く、本棚だけが二階建てで、高所の本を取るために華奢な螺旋階段が設置されていた。

書斎机のPCモニタ以外はヴィクトリア朝の貴族の書斎もかくや、といった部屋の真ん中に、白衣の男がひとり、うつぶせで倒れている。

背中には、ナイフが突き立っていた。

晶は扉を閉めてから彼に歩み寄り、しばしの間無言で眺める。

「で、今日の死因は？」

「……考えて」

うつぶせになった男はくぐもった声で言い、片手でさあ来い、というような所作をする。晶はすかさず、彼の背のナイフを蹴り飛ばした。両面テープで固定されていた玩具のナイフは軽い音を立てて転がり、晶は転がった男の後頭部に足を載せる。

「このまま窒息死」

「ちょ、違っ、違う！ そうじゃ、ないでしょ！」

床の男はじたばたともがき、どうにか晶の足を押しのけた。

飛び起きるのかと思えばそうでもなく、絨毯の上をずるずる這いつつて距離を取り、上目遣いで晶を見あげてくる。

「それは推理じゃなくて殺人だよ！ 推理してよ。推理！ この状況、どう見たって完璧な密室殺人でしょ」

「突っこみどころしかない発言だけど、とりあえず、誰もここで死んでないだろ」

晶は面倒くさを隠さずに言うが、相手は必死だった。

「そうじゃないの、死んだっていう設定なの！ 空気読んで！ わかんないならヒントあげるから。いい？ まずは一見凶器に見えたナイフだけど、あれはね、本当の凶器をこまかすためのブラフなんだよ」

転がったままの相手の主張を聞き流しながら、晶は自分の靴のつま先についた汚れを見下ろして言う。

「灰か」

「えっ」

驚愕の声をあげた後、床の男は動きを止めた。

晶は靴を片方脱いで白い汚れを確認し、絨毯の上を数歩歩いて考えを固める。

「本当の凶器ってものがあるとしたら、どうせ灰だろ。そこにも少し零れてるし。暖炉の灰を靴下か袋かなんかに入れて殴る。灰は暖炉に捨てて、あとは袋を焼くなりなんなりで

証拠隠滅。だけど季節考えろよ。真夏だぞ。暖炉に火が入ってないだろうが」

「そんなに晶が言うと、相手はゆっくりと上半身を起こした。」

肩幅はあるが、やけに薄っぺらい男だ。年齢は晶と同じ二十代前半だろうが、日本人離れして彫りが深いのと、目が大きいせいで、どこことなくラテン系の美少年みたいにも見える。髪はくったりとして長めの茶色。目は不思議なくらい真っ黒で、薄闇でも硬質な光沢を帯びるのが奇妙な印象だった。

彼は床にへたりこんだまま、大きく見開いた目で晶を見あげて言う。

「なんでわかつちゃうの」

「なんでわかんないんだよ。よくあるトリックだし、お前のネタは単純で、いつも同じ方向にズレすぎて逆にわかりやすいよ。どうせつまんないもん読んだんだろ」

佐鳥たちに対するより大分雑に言って、晶は書斎机に積まれた本をばらばらめくった。案の定、昔懐かしいミステリーが何冊か机に出ている。晶は特に読書家ではないが、さすがにこのあたりは小学校くらいで通った道だ。

一方の青年は、頭を抱えて悲鳴をあげた。

「ええええええ！ 酷い！ 晶が酷い！ 僕、すごい考えたのに！ 動機とかさ、トリックとかさ、部屋中探したら、もって手がかりとかあったのに！ それ全部すつとばして、なんとなくて終わり？ 晶ってばかだよ。立ち止まって三秒考えられないの？」

「三秒も要らないこと考える暇があったら、最初の〇・五秒で目の前のばかを踏む」

「僕はばかじゃない、単なる暇人だ！」

力の限り主張され、晶は曖昧に笑った。

「言っとくけど、それ、人間社会で自慢できることじゃねえからな？」

「自慢できてもできなくても、僕は暇なの！ いい？ 僕は一日二十四時間、ずーっとこの部屋にいるんだよ？ この、なんの秘密もない部屋に！ 秘密がないってことは、僕にとっては空っぽってことだよ。空っぽの部屋でひとりだなんて、拷問すぎる！」

髪を振り乱しながら言う彼は、真剣そのものだ。

「それで新しく『秘密』をねつ造しようとして、あの出来そこない密室トリックか。まともな本も山ほどあるのに、もうちょっと建設的なことをしようって気になれよ」

晶はちらと相手を見て言い、手元の本を何冊か横にのけて手を止めた。ミステリー本の下から出て来たのは、開きっぱなしの大型本だ。一般的な日本のハードカバーの四倍ほどの面積はあるだろう。紙はすべて黄ばんでおり、装丁は赤い革のよう。天方が持っていたものとよく似ていた。

相手は苛々（いらいら）と部屋を行ったり来たりしながら、ただひたすらに主張する。

「ここにある本の知識くらい、あらかじめ全部持つてるよ！ いいかい、賢さと正しさには大したバリエーションはないんだ。無限のバリエーションを持つのはばかだけ。つまり、

賢い僕のトリックはちゃんとしたの。ばかな君の推理が雑だっただけ!」
 「じゃあ、犯人がお前を殺した動機は?」

開いたページに視線を落とし、晶は言う。相手はぱっと表情を明るくして手を挙げた。
 「それはね、狂気と絶望だよ! 彼はとある本を読んで、椅子と人間は原子レベルでは同じものだと思いついたの。ちなみに原子には自然科学と哲学の文脈があつて」

「却下」

晶が即答すると、青年は愕然^{がくせん}として身を乗り出す。

「なんで!」

「全然共感できない。もっと簡単に言うと、きゅんと来ない」

晶は開いたページを指で叩きながら、適当に答える。

相手は何か言いたげに口を開け閉めし、どうにか気を取り直して食らいついてきた。

「きゅんとのほうがわからないよ! いいかい、僕だって人間心理は研究してるんだ。この動機には現代を生きる若者の、得体の知れない先行き不安な気持ちを描き出されている。心の闇だよ、哲学だよ。さあ、人間心理のエキスパートと呼んでくれてもいいよ!」

「へー。じゃ、エキスパート先生は、俺が今何を考えてると思う?」

「ちよっと待ってね。君のワイシャツには袖をまくっていた跡がある、外が暑かった証拠だ。ズボンと靴の状態から、今日は自転車通勤。寒暖差で疲労して眠くなった君は悪夢を

みて、それから目覚めさせてくれた僕に対して、今、感謝の真っ最中だと思う!」

「へー」

「うわああ、何、その手抜き返事! もう駄目だ、絶望した、僕はおかしくなる、見てろよ、すぐにおかしくなるよ、もうすぐだよ、ほらなるよ、なりそうじゃない!」

青年の声が本格的に頭痛を引き起こしそうなものになってきたので、晶は素っ気なく言葉を投げ出した。

「だったらとつと帰ったらいい。帰れるだろ? その体さえ捨てれば」

「捨てない」

不意に相手の声が冷たくなる。ああ、畏^{おそ}だな、となんとなくわかったが、晶はのろりと彼に視線をやった。青年の真っ黒な瞳^{ひとみ}がきらきらと鉾^ほ石^{いし}じみて光る。

この瞳は、読めない。ひとの顔を見れば大体の気持ちがわかる晶でも、何も読めないのだ。何を考え、何を思っているかがわからない。

本当に見えているのかすら疑わしい瞳を晶に据えて、彼は言う。

「僕は、君の秘密を暴くまでは帰らない。五年前、君が僕に何をしたのか。どうしてこんなことになったのか。何もかもが明らかになるまで、僕が君を絶対に死なせない。だからさ、上で暇な昼業務なんかやるのやめなよ。真っ直ぐここに来ればいい」

「俺に秘密なんかない。あのときのことは覚えてないってだけだ。それとWMUAにとつ

ちや、通常の美術館業務も立派な仕事なの。もう、変なチャット投げてくんよ」
晶は小さく肩をすくめて言うのと、革張りの椅子に腰かけてモニタをのぞきこんだ。

相手の青年はよろよろと立ち上がり、鶏がらみたいな両手を書斎机の上に置く。
「美術館業務も立派な仕事？ 誰がそう言ったの。君はW M U A のかけがえない一員で、普通の職員としても必要だって？ それは氣を使われちゃったんだよ。君は学芸員の専門教育も受けてないし、君目当てのおめでたい女の子が通ってくるのも迷惑でしかない。みんな裏では『わざわざ表に出てこねえで昼間は家で寝てろよ』って囁き合ってる」

彼の言うことはもっともらしい。いつもそうだ。

晶は、とん、とん、と、指で古い本の一節、ひとつの単語を叩く。晶はこの本がなんだから知っている。ギリシャ語で出版された本の英訳本だ。晶の指の先にある単語は『秘密』。一文全部を訳すと、『その者はすべての王宮や、秘められた場所の秘密を暴く』となる。

「お前、今、自分が何言ったかわかってるか」

「わかってるよ。真実だ。僕はいつだって真実を言う」

「そういうことは言ってない。お前は今、うちの全職員と、お客さんと、何より俺を侮辱した。改めて思ったけど、俺、お前のことが嫌いだ」

「晶」

おびえたような青年の声。

黄ばんだ紙の上に、ぼたぼたと水滴が落ちてくる。

視線を上げると、真つ黒な目を見開いたまま涙を零す青年の姿があった。とつさに生理的な嫌悪がせり上がってきて、心臓の怒りに火がつきそうになる。爆発する。机から本を叩き落として、相手の襟をつかんで怒鳴りたい。もしくは勢いに任せて殴りつけたい。晶は唇を引き結ぶ。駄目だ。この男に心を動かされてはならない。相手に感情を強制されること。それはすなわち、コントロールされるということだ。

これ以上怒るな。恐れるな。冷静でいろ。同時に、素直でもいろ。隙を見せるな。

——自分を、信じて。

白衣の青年は目を閉じず、逸^そらさず、両手で涙をぬぐいながら口を開いた。
「ごめん、晶。怖い顔しないで。君に怒られると悲しくて死にそうになる。僕だって、傷つくんだよ。君だけが僕を傷つけられるんだ。君がいつも眠いのって、家じゃ寝られないからだよね。君は本当の恐怖を知っている。恐怖そのものを『見た』からだ。そんな人間じゃ耐えられない。辛いよね。苦しいよね。僕は君を、心配してるんだ」

恐怖を『見た』。

そう言われた途端、ざらっと、目の前にノイズが走ったような氣がする。

ノイズの向こうにあったのは、五年前の青い空だっただろうか。どこまでも晴れた空。広がる砂漠。たなびく黒煙。砂漠を貫く道路の真ん中に、大型バスが転がっている。周り

には人影がある。たくさん人影が、みんな道路に伏している。

道路に立っているのは、たったひとり。瘦せぎすで猫背のシルエット。赤いチェックのシャツ。それしかわからない。だって、他はみんな焼け焦げ、血で汚れている。赤黒い手足。赤黒い首筋。顔の中で唯一白い歯列が、強い陽光にきらめいている。

晶の視界は震える。あのときの感情を思い出しそうになる。あのとき見たものを、認識し直しそうになる。

どこかで、聞き慣れた友達の声がする。

「大丈夫、安心して。君は僕が助けてあげる。家に帰るのは、もうよしなよ。ずっとここにいたらいい。僕が守ってあげる。全部の恐怖をなくしてあげる。代償は簡単なものさ。」

君は僕を退屈から守るんだ。君の秘密で、この部屋をいっぱいにするんだ」

彼の声は真摯に響く。この響きに嘘はないと、晶の本能は判断する。心底晶を守りたいと思ひ、自分も助かりたいと願ひながら、彼は囁く。

「助けてって言いなよ、晶。さっき、遊江、って僕を呼んだみたいにな」

再び目の前に、ざらりとノイズが走った気がした。心が震える。身体も震える。心臓の熱さが限界を超えて、全身を巡りそうになる。晶は、とっさにポケットの中の土星のメダルを握りしめた。

思いこみこそ、最重要のマジック。

天方の台詞を思い出し、冷たいメダルの感触に意識を集中する。情緒不安と緊張で、目蓋が痙攣しているのがわかる。でも、大丈夫だ。このくらいなら大丈夫。自分はたったひとりで目の前の男に相対しているが、この部屋はいつでも監視されている。監視カメラの向こうには、天方の冷徹な瞳が、鬼の形相で眉根を寄せた佐鳥が、そして冷静な監視員たちと、館長がいる。

ひとりひとりの顔を思い出しながら、晶はことさらゆっくりと瞬いた。同時に目の前のノイズは洗ったように消え去り、現実の風景に焦点があう。

ここは薄暗い書斎だ。目の前には白衣の男が立っていて、彼の首からは晶と同じ様式のスタッフ証がかかっている。印刷されているのは青年の顔写真と、音井遊江という名前。

「さっき、俺は確かに、遊江を呼んだ」

晶はつぶやき、不意に音井のスタッフ証を握った。写真の中の音井は、まなじりを下げてにっこり笑っている。晶は知っている。

高校時代から付き合ひのあった音井遊江は、けしてこんな顔で笑わない。

「お前じやねえよ」

自然と、晶の声から感情が剥がれ落ちる。スタッフ証をいささか乱暴に引くと、『音井』はよろけるように頭を下げた。至近距離になった相手の瞳を見つめ、晶は囁く。

「音井遊江は俺の親友だった。口が悪くて、笑うのが何より苦手な奴だった。奴は五年前

のエジプトで死んだ。お前はその体に乗っ取った、悪魔だ。『すべての秘密を暴くもの』、プルソン型アンノウン」

真っ黒な瞳が晶を見つめ返す。ぽかんと虚ろな瞳だった。まるで顔に空いたふたつの穴だ。何もない。ただの穴。よく見れば、音井の肌はあまりに白く、つやがない。粉を吹いたような白。頭蓋骨に直接皮を張っただけの死体じみた顔。なのに薄らばんやりと意思の気配がある。彼の目の奥、ぽっかりと空いた眼窩の向こう、遙か遠いところで、誰かが、何かがこちらを見ている。

ひとではない何かが、ただひたすらに、じっと。

これが、悪魔だ。

「いいえ。悪魔じゃないですよ、鷹栖君」

不意に机上のスピーカーから声がして、晶はぎょっとしてPCモニタを見た。

音井は音井で、ひつ、と息を呑んで大きく机から飛び退く。

「大変楽しく拝聴していたんですけど、急にお邪魔してすみません。悪魔っていうと色々、ほら。うるさい方々がいるでしょ。だからね、正式名称使ってくださいね。『存在証明不可能生命体』。声に出して言いたい日本語。リピート・アフター・ミー」

完璧なカタカナ英語を披露した人物の姿は、モニタのテレビ電話窓の中にあった。秀でた額に、品のいい驚鼻。金茶の髪をびっちり後ろへ流し、タイトな紺のスーツを着た灰色

の目の中年紳士は、どこからどう見ても白人だ。

「館長」

晶が慌てて呼ぶと、モニタの白人は優雅に片手を挙げた。

「はい。こちら、館長さんのブラッドショーです。というかねえ、君たち。仲いいのはいいんだけどね、ほどほどにしときなさいね」

「やめてください、俺たちは仲よくありません！」

「そうだよ、もう契約から五年も経つのに、晶は全然仲よくしてくれない！」

「契約はしてねえだろ」

「したよ！ したけど、なんか晶が変な技で反故にしちゃったんでしょ！」

晶と音井が怒鳴り合うと、館長はうんうん、とうなずき、手元のカップを引き寄せた。

「じゃれあい大いに結構、わたしには大変楽しいです。役得です。投げ銭したいくらいです。まあ給料は払ってるわけですけど、個人的にね。だけど日本の警察さんは怒りそうだなあ。彼ら、はじめかどうかは知らないけど、ばかにされるのは嫌いだから」

「警察は俺たちには関係ないでしょう」

晶は言う。館長は軽く肩をすくめて続けた。

「現在、世界の未解決事件の四割は存在証明不可能生命体が関わっているとされています。アメリカなんかじゃW M U Aが積極的に捜査協力を行っている。日本ではまだまだ軽視さ

れがちなジャンルですから、我々の活動も地味ですけど。数年後には君たちが実際に不可思議な殺人現場に赴くことになりますよ。このウェッジウッドを賭けてもいい」

「備品を賭けないでください。あと、存在証明不可能生命体の前で『賭ける』とかいうのも禁止です。こいつらは人間との取引をスポーツかなんかだと思ってるんだ。このあほな若造でも、館長に変な契約しかけてこないとは限らないですよ」

晶が険しい声を出すと、音井が顔を引きつらせる。

「今度は直球でデイスってきたね」

「本当のことしか言ってるねえよ。生まれが最近で通称がないのも本当、『世界中の秘密を暴く』能力持ちのくせに、推理はへたくそ。同族との殴り合いにしか役に立たない無能」

「僕をチンピラみたいに言わないで！ 秘密を暴くのは生まれ持った趣味嗜好だし、僕は常識的文化人だ。晶が危なきや守ってあげるけど、ほんとに殴り合いなんか大嫌い！」

「わがままのうえ、役立たずってことだろ」

「昼の君より大分マシだと思うけど？」

館長は険悪な調子でにらみ合う音井と晶を見つめ、力一杯机を叩いて声を張り上げる。

「羨ましい！」

「館長！ 本音が漏れすぎです」

晶は顔を引きつけて言い、音井は全身を震わせて後ずさった。まるで怯えた猫だ。

館長はというと、モニタの向こうで完全に目を据わらせている。

「わたしはいつも本音に忠実に生きています。一体なんのためにW M U Aに入り、日本行きを志願したと思ってるんです。君たちのためですよ。悪魔交渉人の鷹栖君に、特殊人類の音井君。君たちは世界にたったひとりずつの奇跡的存在です」

悪魔交渉人に、特殊人類。館長の口から飛び出した奇妙な名称に、晶は顔をしかめた。

「館長、その呼び方はやめてくださいって言いませんでしたっけ。大仰だし、悪魔ってはっきり言っちゃってるし」

「これが一番手取り早いし、何より格好いいですよ。館長さんは君たちが大好きです。思わず写真集まで作ってしまいました」

「写真集？ 写真集って、何？」

おそろおそろ訊いたのは音井だ。さっきまでの元気も、悪魔的な迫力も失った姿で、晶の後ろで震えている。館長はそんな彼ににっこり笑いかけ、手にしていたカップを置いて、机上のハードカバーを持ち上げて見せた。

「よくぞ訊いてくださいました、これですよ」

卒業文集か何かを彷彿とさせる重厚な大判の本を開くと、中には晶と音井が口げんかしている様子がそのまま印刷されている。無駄な鮮明さがばかばかしに拍車をかけ、晶は思わず空に視線をさまよわせ、音井は真剣に青ざめた。

館長はどこかうっとりした様子で続ける。

「どうですか、館長こだわりの高画質。君たちのプロフィールや、好物、名言集なんかも入っています。これを開けばいつでも君たちと一緒に居られる仕様ですよ、素晴らしい」

「晶、やっぱり僕、こいつは嫌だよ！ 変態だもん。変態以外の何者でもないもん！」

「そうだな、それはそのとおりだ」

半泣き状態の音井に今度ばかりは同意し、晶はこめかみを指で押さえた。

「で、館長。それを一体どうする気です」

「社内販売でもしようかと思ってます。若い女性職員に結構売れるんじゃないかなあ」

「廃棄してください！」

「嫌です。わたしは印刷費を回収したい」

「いきなり現実的にならなくください！ 大体女性職員はあなたと違って分別があるんだ、売れやしませんよ。俺たちは人気どころか、怖がられてるんですよ？」

廊下で突き刺さってきた視線を思い出しながら、晶は言う。仕方のないことだ。晶は今、この世界で最も『悪魔に近い』人間なのだ。それは音井の機嫌を取れる、という意味だけではない。館長は落ち着いた声で語り続ける。

「怖がっているのではない、畏敬の念を抱いているんですよ。君たちは自身の価値をもっと理解するべきです。まずは音井君こと、ブルソン型君。わたしたちWMUAは、最大多

数の人類の幸福のために悪魔を再定義しました。存在証明不可能生命体、それは信仰や人種に拘らず人類に交渉を仕掛け、人間の『死に至る物語』を蒐集する知的生命体です。彼らが望まない限り、我々は彼らを認識することはできない。しかし音井君は鷹栖君の死を望まず、ひとの身体を借りて五年も我々の目の前に常駐したあげく、WMUAの活動に協力すらくれていて。これはもう、わたしたちの定義する存在証明不可能生命体ではありません。奇跡的に舞い降りた、唯一の『特殊人類』なのです」

モニタごしに指をさされた音井は、本棚の隅で小さく身を縮めている。

これが悪魔だと言われて、誰が信じるだろう。

——晶は信じる。そして、WMUAも信じた。

悪魔とは、天使とはなんぞや。はたまた神とは。論争、戦争の末に、神という最大の謎を棚に上げた人類が導き出したひとつの答えが、晶たちの所属するWMUAである。

館長の声は徐々にうっとり歌うように変化してくる。

「鷹栖君も珍しさでは負けていませんよ。五年前の悪魔との遭遇を切り抜け、認識不可能なはずの悪魔が『見える』ようになったのは、現時点では君が唯一です。君は悪魔と我々の間の懸け橋になり得る存在だ。WMUA日本支部のシンボルと言ってもいい。和をもつて貴しとなす。悪魔関係事件の事前防止と被害の軽減が、我々の目指すところです」

「その精神については、俺も尊敬するところなんですけどね」

ため息混じりに言い、晶は軽く頭を掻いた。

五年前の事件以来、晶のもとには様々なスカウトが来た。悪魔の秘密を知りたい者、その秘密を封じこめたい者、悪魔を使つての悪魔退治を望む者。中でも最も情熱的で、調子がおかしかったのが、このジェイムス・ブラッドショーだ。

『流ちょうな日本語で滔々と語るイギリス人紳士めいたアメリカ人』というインパクトをひっさげて現れた彼は、「悪魔との共存」という理想を堂々と掲げ、そのために悪魔に好かれる物品、悪魔関係事件ゆかりの品などを管理し、調べ、封印する美術館の設立を提案し、その職員として晶を誘った。彼は音井に対しても怯む様子が無いどころか、日本式に名刺を差し出しながら全身から「好き」のオーラを発して質問攻めにしたので、音井がすっかり怯えてしまったくらいだ。

晶はそんな彼とW M U Aに興味を持ち、母体となった秘密結社の歴史、W M U A自身の中立性、公共性を知り、それまで世話になっていたひとのもとを離れることとなる。

「何が尊敬だよ、胡散臭い。人類と悪魔がみんなで握手する日が来ても、僕はそいつには爪の先でだって触らないからね」

背後からの恨みがましい声にため息を吐き、晶はモニタに向き直った。

「館長、俺はともかく、こいつに誇りとか責任とかを覚えさせるのは無理ですよ。悪魔なんです。今日は明るいお説教をされるために電話したんですか。それとも、単なる野

次馬ですか？」

「わたしが野次馬電話をかけたことなんか、ありましたっけ？」

もちろん、年中あった。晶が言い返す前に、音井が口を挟んでくる。

「あれ、野次馬じゃないなら、僕宛ての仕事電話ってこと？」

館長はうなずき、調子外れの声を出した。

「半分、ぴんぼーん。君と鷹栖君宛てです。鷹栖君だけ呼ぼうかとも思いましたが、今日の搬入物は特に難しそうな代物でして。最初からふたりに見てもらおうかと」

館長がキーボードを操作すると、少し遅れて、ぼーん、と着信音が響き、ファイル受信を求める窓が開いた。晶がそれをクリックすると、一枚の写真がダウンロードされる。

「なんです、これ」

写真ファイルを開くなり、晶は少しばかり顔をしかめて言った。

目の奥がつん、とする。ほんのわずかな痛みのようなもの。悪魔がらみのものを目にしたとき特有の感覚だ。反射的に不安がわき上がるのを、どうにか振り切って目を凝らす。写っていたのは、駐車場らしき場所に置かれた巨大な壺だ。

「わあ、凄い！信じられないほどへったくそ！」

脇からのぞきこんだ音井が叫ぶ。晶は難しい面持ちで、自分の顔を撫でた。叫ぶほど下手な壺かどうかはおいておくとして、確かにこの壺は奇妙だ。妙な違和感がある。

「素朴な壺ですね。でかそうですけど、コンクリート製ですか？」

「石なんですよ、これ。石から削り出してるんです。無駄に手間はかかってるんです」

「無駄って言うっちゃ可哀想でしょ。……確かに悪魔が関わってる気配はしますけど、なんだか変ですね。悪魔は人間の強い感情と、その発露が好きだ。だから芸術作品も好きなわけだけど……これはあんまり迫力がないな。おい、お前。これ、そそられるか？」

最後はぞんざいに問いを投げる。音井はちらと不満げな視線を晶に投げたが、すぐに視線をモニタに戻した。真っ黒な瞳は吸いこまれるように壺にくぎ付けになっている。

彼曰く、悪魔は何かに強い執着を持って生まれ、一生それに殉じる生き物なのだそう。音井に憑いた悪魔が、生まれつき執着を持つもの。それは『秘密』。

音井はモニタ上の画像から、秘密を拾い上げようとしているのだろう。じりじりと身を乗り出して、やがて大きく首を傾けた。

「造形的には全然だけど、秘密はありそうだよ。まず、素材が変だ。粒子が粗くて脆いし、表面もざらざら。彫刻用の石じゃないよね。いわゆる砂岩じゃない？ とすると、主な用途は建材だ。作者はどうして、こんな石で壺を彫ろうと思ったんだろう」

「なるほど、言われてみりやそうだな」

漠然とした違和感が、音井の台詞で強さを増す。さらに館長が追い打ちをかけた。

「これねえ、リサイクルセンターにいつの間にか置かれてたそうなんです。事前にうちで

配布しておいた検知シートに反応したんで、ご連絡いただいたの。先に警察に連絡されなくてよかったですよ。X線かけたら、中に人間入ってますって」

「今、さりとて凄いいましたね。人間？ 死体ですか？」

晶が目をむいて聞き返すと、館長はどこか茫洋と首をひねった。

「シュレディングアの猫です。微動だにしないから死体だと思いたいんですが、リサイクルセンターのひとつ、誰も中をのぞいてないんですよ。のぞく気にならなかったというんです。音井君の外出許可出しますんで、ふたりで第三実践室に来てくれませんか？」

ふたりでと言われ、晶はとっさに眉根を寄せた。

普段音井はこの部屋に監禁、監視されている。それが外へ出るということは、彼がWMAの臨時職員として認められる、ということなのだ。

音井が外に出ている間、晶は彼と共に行動し、監視を続けなくてはならない。死んだ親友の顔をした悪魔と常に顔を合わせ、軽口を叩くふりで正気を保つ。そのうえで悪魔に関わる物品を調べ、ときには他の悪魔とも『交渉』する。

晶にしかできない、突飛で困難な仕事が始まろうとしている。

続きは6月14日創刊の富士見L文庫で！